伝統工芸（都城木刀）

木刀一途～都城で栄えた職人の技～

名人 新留（にいどめ） 義昭（よしあき）・宮崎県都城市

聞き手 狩俣（かりまた） 恵（めぐみ）・沖縄県立中部農林高等学校2年

■自己紹介

生年月日は昭和29年12月18日。出身地は宮崎県都城市です。生まれてから64年間ずっと都城にいます。今は妻と母と3人暮らしです。子供は3人いるんだけど、男の子は1人。女、女、男でね。やっと最後に男の子が生まれたの。孫は6人いるよ。自分の兄弟は私と弟で2人だけ。

職業は、木刀製造をしています。設立は昭和43年。私が2代目で18歳のときに仕事を習い始めた。その7、8年後に私の弟もこの仕事を始めて、親子3人でやっていました。父親は亡くなったので、今は弟と2人だけで営業しています。

■日本の木刀会社は世界に3つだけ

まず、木刀製造業者さんが都城に3軒あります。そして全国でも3軒です。4軒あったんだけど9月いっぱいで辞められるから10月からは3軒だけなんです。木刀製造を中心に仕事をしている人がね。だから全国どこを探しても沖縄から北海道まで全部都城産なんです。あと全国に流通している90％が都城で製造されています。残りの10％は中国産。最近は、海外で剣道が盛んになってきているから、そっちの方にも送ったりするので、もう3軒ではちょっと少ないね。昔はまだ多かったんですよ。通常は、一人の職人が剣道型の木刀が作れるようになるまでに5年ぐらいはかかる。それで流派別とかいろんな木刀を作れるようになるまで、だいたい10年すれば一人前になるかな。だから最近はもう1から10まで全部一人で作るんじゃなくて、その各部分だけ職工さんにまかせるという感じで製造していて、私らみたいにすべて一人で作れる人たちがもうそんなにいない。だから木刀を一人で全部作る職人がもう4人ぐらいしかいないけど、それも全員高齢者になっているね。だから社長連中のなかで私が64歳なんだけど、一番若いんですよ。私らの仕事は人数も少ないから、全部合わせても都城で30人もいないぐらい。だからもう特殊なのよ。それで伝統工芸のなかで

は、木刀は出回っているわりには作れる人数は少ないね。

■都城木刀の生産量と木材

昔から木刀を作っていたけれど、盛んになったのは戦後だね。戦争に負けて、武具とかが作れなかったから、それが解禁になったときに剣道の木刀とかが盛んに作られるようになったね。それで、なぜ都城で盛んになったかというと、南九州に木刀を作る材料がいっぱいあったから。その材料を買い求めに来て、製造まで盛んになった。最初は木材を関西とかにも送っていたんだけど、送るよりこっちで作った方がコストも安いからね。だから都城でだいたい90％ぐらい生産している。

木材は都城産というか、霧島山系産だね。つまりは、熊本、宮崎、鹿児島の南九州の山で取れる材木が多いね。最近はだいぶ木刀の材料が少なくなっているから、白樫などの材料は関東とか関西からトラックで持ってきてもらっています。要するにあちらではあまり白樫の材木の用途がないんです。だからね、こっちにみんな材料を持って来ているから、木材が必要な人は、福岡とかいろんなところから都城の市場に買いに来ています。なんで材料がなくなったかというと、国有林を保護するという観点で国有林を伐採しなくなったから。国有林の木を切らないもんだから、民間の山からしか材料が供給されなくて、もう以前の半分程度になっている。だから材料集めが大変なんです。

だいたい国産の木材が80～90％かな。残りは海外の材料。黒檀なんかの黒っぽい木があるんだけど、そういう材料は全部日本にはないから、みんな海外産なの。海外の材料は重い材料で、インドネシアとかアフリカ産とかだね。黒檀とかは高級なので、紫黒檀とか紫檀なんかになると、木刀1本が10～20万円するのよ。

■都城木刀が栄えたわけ

これはね、木刀を浮かせて固定している物「万力（まんりき）」っていう道具なの。都城の木刀が栄えたのは、これのおかげ。昔はこうゆう具合に宙に浮かして作るという技術がなかった。昔は机に置いて、ひっかけたりしてずれないようにして作っていた。だから昔の木刀というのは、あんまり反りがないんですよ。なんでないかというと、まっすぐした木材を使って、削ってから焼いたり伸ばしたりして、反りを入れていた。だから、そういうものしか出来なかったの。だけど、都城の人がこの万力を開発して、どう回しても削れるようになった。これが都城で木刀作りが栄えた理由なんです。

木刀作りに欠かせない「万力」

■木刀の種類

木刀は種類が多くて１００何種類もある。たとえば、宮本武蔵が使っていた「二天一流」とか柳生流だけでも一つの流派で5、6本くらいある。正確に数えたことはないんだけど、１５０～１６０種類くらいあるね。一つ一つ流派で細い木刀があったり太い木刀があったり、刀の反りが真っすぐだったり曲がっていたり、流派によって曲がり具合も違うから流派に合わせて作っていくの。

そして、木刀は種類によって長さが決まっています。剣道型の大刀は昔の長さでいえば3尺3寸5分で１０１・５㎝。中刀が3尺で91㎝。小刀が1尺8寸で54㎝ぐらい。剣道型のはだいたいそれぐらいに決まっているん

だけど、昔の古流の寸法が残っているもんで、その寸法で流派は作っていくから長さがそれぞれ違ってくるの。でも木刀を１００％とした場合、剣道型が70～80％くらいで残りが流派別の木刀になる。

■カンナは世界に1つだけ

やっぱり木刀は元々硬い材料だから削りにくいんです。建築業の大工さんなんかが使う木材とは硬さが違うんです。だからそれに応じて特別なカンナを使うし、刀の削る部分に応じて20丁、30丁とあって使い分けます。

手作りのカンナ

私らのカンナは特殊なものでね、カンナを買って、あとは自分で手作りします。カンナは普通に市販されてるから、それを買って自分でちょっと加工して使います。だから木刀1本作るのに何種類かカンナを使って仕上げるという感じ。削る場所によってカンナを使い分けている。でも、大まかな木刀のかたちまでは機械で作っていくんですよ。あとは反りの部分をカンナで削って丸くしていく。少し残っているとこは少し平らのような反りにかかるやつで削る。そうでないとね、使うところによっては浮いてしまって全然かかんないのよ。だからそれに合わせて作っていく。そして、刃が深いカンナは木刀の反りにあたる部分が深いカンナを使わないといけなくなる。そして刃が浅いものは反りが少ないカンナで使うの。その反りに合ったカンナを使わないと綺麗に反りができないんです。だからカンナは色々な種類がある。今は大部分を機械がしてくれるから、仕上げガンナとかなんだけど、昔は荒ガンナ、中ガンナ、仕上げガンナの3種類で仕上げていたんです。最近の木刀製造はだいぶ機械化されているんだけど、やっぱり最後はカンナでちゃんと自分の手で削って仕上げている。これが、私のこだわり。

■木刀になるまでの流れと私らの生命線

まず、木材を市場で買って製材所で製材してもらって、板にします。倉庫で1年以上干します。そして木刀の種類によって木刀の型があります。これも種類によって全部反りが違ったり、大きさが違ったりする。この型こそが、私らが作ってきた生命線なんです。これをいくつ持っているかで、どれだけ木刀が作れるかが決まってくる。木刀の種類によって全部この型が違います。それでずっと作っていくから、もう40年近く使っている型もあります。そして型で板に鉛筆で木刀の型を縁取っていく。節があると木刀を作れないから、節を避けて型を取っていくと1本だけしか木刀が取れない板もある。運がよければ小刀が何本か作れるんだけど、板にしてみないと何本その板で取れるのかもわかんないのよ。だから材料を買っても当たり外れがある。

木刀の型

型が決まったら、材料の使用する部分に節や傷がかからないよう線引きをします。線引きした材料を「帯のこ」（今は、バンドソーが正式な名前です）の機械で線に沿って小割します。次は小割にした材料を「横切り」という

機械で長さを切っていきます。次は手押しガンナで片面を平らにします。そして自動ガンナで木刀の厚みを揃えます。その次に握りの部分、「柄」を中心にして木刀を作ります。今度は「面取り」で、木刀の背の両サイドの平らなところを落としていくんだけど、その機械の刃を変えて斜めに落とします。反りのところは反りの部分を削り過ぎないように木刀の種類によって自分で作った型を使っている。次は「カッター」です。カッターの刃にも何種類かあります。尖った木刀とかもあるからね。その代わり特注品はもう1本とか2本しか注文がこないから全部カンナで作んないとしょうがないけど、常時作るような品物の刃は作ってある。そして反りをカンナで削っていったら今度はペーパーで磨いていきます。あとは柄と刃渡りの境目、「刃区（はまち）」（つば止め）のとこに段を付けるだけです。昔はこの段もノコで切ってヤスリで磨いていたんだけど、段を付ける機械が開発されて、さらに便利になった。次は機械についたヤスリで木刀を磨いていきます。ヤスリの100番、240番である程度の磨きはオッケーです。高級品とかになってくると600番で磨いたのちに1000番のヤスリを使って手で磨いていく。あとは切先（きっさき）を切って、最後に汚れ防止のためのニスを塗って完成です。高級品は通常はあんまりニスを塗らないけどね。

木刀を押さえる道具

柄と刃渡りの境目

木刀は剣道型だと1日に30～40本作ります。これがオーダーメイドになると1本作るのに図面を見て、寸法見て、反りとか色々見てだいたい2時間かかる。1日に作るのにせいぜい4、5本くらい。剣道型の木刀とか1本作るのは手際が悪いからまとめて30本とか工程ごとに回して作っていく。

ニスは白樫と赤樫とがわからなくなったりするからハッキリ違わせるために赤樫には赤ニスを塗る。ニスは赤いのもあれば、透明のもある。そうゆう具合に区別を付けないと後で見比べてもわからなくなるから。そして木刀屋さんによっては、窯で蒸して色を付けるところもある。

■節があるとダメ

木が大きくなる過程で傷を負ったりすると、傷付いたところがなかに入っていってそのまま大きくなってくるから、たまに木材の内側に節が入っていたりする。それでもうその板はダメなんです。節の部分は叩いたりすると割れるからね。これが削ってなくなれば大丈夫だけども、少し奥に入っていたりするともう落ちないからね。節があるところは、再利用も

木材に表れた節

できません。その長さにもよるんだけど、大刀を作って節が出るとすると、今度はそれを中刀の長さにする。中刀の長さにもできなかったら今度は小刀にする。小刀にできなかったら今度は短刀にする。それ以下のものはもうどうしようもないから捨てる。そして、作っている途中で節が出てきたらその木刀もダメだから結局は捨てます。材料のときにその長さでどんどん振り分けていけるけれども、品物を作っているときに節が付いてたのはもう傷がでたみたいな感じになるから破棄します。

■手作りシュリンク包装機

この一斗缶で手作りした道具は、木刀をシュリンク包装するためのもの。これに通すと、中の蒸気でシュリンクが縮んでピシッとくっつくの。注文すれば、こうゆう機械がちゃんと売ってるの。それは50万円くらいするんだけどね。でもこれは一斗缶をもらって作るから、これを作るのに１００円くらいしかかからない。これの穴を開ける位置も色々工夫してあって、今の状態が一番いいの。上の方に通して、シュリンクするから上に蒸気が溜まらんと出来ないの。でもあんまり下でもダメで、あんまり上でも蒸気が溜まんない、微妙な位置があって今の位置になったの。１００円は１００円でも結構苦労しているものやね。でも内容は50万円の機械とは変わらないね。これを作る前はね、鍋にお湯沸かしてしゃもじで水をかけて作っていたの。それからすると、とても便利になった。

手作りの包装機

■大切なことを教えてくれた人物

18歳でこの仕事についたとき、私らのその仕事とはちょっと違うんだけれども、ある職人さんから大切なことを教えてもらいました。心構えみたいな感じだね。「表に見えないところを大事にしなさい」という言葉を今も大切にしている。要するに家具でも木刀でも普通は表に見えているところを綺麗にするのがあたり前だけど、「見えない部分も気を抜かずにしなさい」と教えてくれたんです。若いころにそうゆうふうに教えられて、その言葉はずっと心のなかに残っています。

木刀を削っている様子

■天職だ！

小学生のころから家が木刀屋さんでずっとそれを見て育ったから、「自分もするんだろうな」という感覚で家で仕事をするんだと思っていた。18歳なったころに習い始めて高校卒業してすぐに仕事を始めたの。私らは不景気になってから家を継いでるから、あまりいい思いをしたことがないんです。親父の代はものすごい売れて儲かったという時代があったけど、私らはなんもなくてね。でも伝統工芸だから、なくなりはしないのよ。まあそれだけが生きがいで良い品物を作れば感謝される。私らは、そうゆう世界。御礼状が来たりするときが一番職人としては良い品物を作って褒めら

れるっていうことだから、この仕事をしていて一番嬉しいときです。だからこの仕事に誇りをもっているよ。やっぱりオーダーメイドで来る人に良い物を作ってあげると、とても感謝されるからね。

そして小さいころはこんな儲からない仕事をなんで親がしたんだろうと思っていたけど、ずっと続けていると「この仕事が自分の天職だ！」と思えてくる。そう思えるようになってからは、かえって楽しくなったのね。趣味を楽しんでいるみたいにね。だから今は何歳まで続けられるかはわからないけれども、自分の体ができる範囲でずっと木刀を作っていこうと思っている。今まで、この仕事に誇りを持って楽しくやってきたから、それが一番良いんじゃないかな。自分が好きなこと、したいことをすることが一番。

［取材日：2019年9月19日、11月16日］

【聞き書きを終えての感想】

私は聞き書き甲子園に参加して、木刀の職人さんである新留義昭さんに取材をさせていただくことになりました。小学校のころに剣道を習っていたこともあって、木刀がどのように作られているのか、なぜこんなにツルツルしているのか気になっていたので木刀の職人さんに取材が決まったときはとても嬉しかったです。しかし、嬉しい半面初めての取材で上手く質問をすることができるのかと、とても不安でした。そんな様子を感じ取ってくれたのか、私のぎこちない質問にも丁寧に答えていただき、雰囲気を和ませるような話もしていただけたので楽しみながら新留さんの話を聞くことができました。

帰宅して書き起こしをしていると、私は木刀を製作しているところを実際に見ながら説明を受けていたので、木刀製作の全体的な流れは理解できたのですが、レコーダーと写真だけを頼りに本文をまとめることがとても難しいことに気付きました。本文では載せられなかった話もたくさんあったので、すべてを書けなかったことが少し残念です。これまで私は中途半端に物事を終わらせていたこともありましたが、今回の取材がきっかけで、細かな部分まで気を抜かないことや継続することの大切さを学ぶことができました。この体験で学んだことを忘れずに、これからも全力で色々なことに挑戦していきます。

profile

新留　義昭

にいどめよしあき

昭和 29 年 12 月 18 日・65 歳

職業：木製品製造業（木刀）

［略歴］宮崎県都城市生まれ。生まれてから 65 年都城に住んでいる。昭和 48 年に泉ヶ丘高校を卒業し、父に継いで 18 歳から木刀作りを習い始める。新留木刀の 2 代目で現在 4 つ下の弟と全国でも数少ない木刀伝統工芸品を作り、新留木刀製作所を経営している。主に木刀を製作しているが、武道で使う木製品の製作もしている。